

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-03

英語の項構造の変化のメカニズム：非人称構文の衰退と統語的受動態構文の創出

大澤, ふよう / OSAWA, Fuyo

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

科学研究費助成事業 (科学研究費補助金) 研究成果報告書

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

6

(発行年 / Year)

2012-05

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2011

課題番号：21520516

研究課題名（和文） 英語の項構造の変化のメカニズム：非人称構文の衰退と統語的受動態構文の創出

研究課題名（英文） THE MECHANISM OF THE CHANGE IN ARGUMENT STRUCTURE FORMATION IN ENGLISH: THE DEMISE OF IMPERSONAL CONSTRUCTIONS AND THE EMERGENCE OF SYNTACTIC PASSIVES

研究代表者

大澤 ふよう (OSAWA FUYO)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10194127

研究成果の概要（和文）：本研究は、英語の変化の中で起きた変化として主語のない非人称構文が衰退したこと、そして古英語においては可能でなかった、前置詞受け身や、能動文の間接目的語を主語にした受動態文などが出現したことを取り上げ、これらの変化は文を形成する原理が大きく変化したことに基づいていることを明らかにした。すなわち英語は、動詞の持つ意味が文型を決める意味・優位型言語から意味にあまり依存しない構造優位型の言語へと変化していったことが原因である。

研究成果の概要（英文）：This research has aimed to give an explanation to two syntactic changes which took place in the history of English. The two salient changes are ① the demise of impersonal constructions and ② the emergence of syntactic passives and subsequent emergence of new passive constructions like indirect passives and prepositional passives. These changes are due to the change which took place in argument structure formation in English. That is, the English language shifted from a lexical-thematic to structure-dependent language. This means that the clause structure is formed mainly on structural reasons like the subject requirement rather than meaning of the predicate.

交付決定額

(金額単位：円)

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 600,000 | 180,000 | 780,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,600,000 | 480,000 | 2,080,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学…英語学

キーワード：非人称構文、受動態構文、項構造、機能範疇、語彙・意味志向型

1. 研究開始当初の背景
受動態構文・非人称構文は、様々な学派の学

者によって長年取り上げられている課題であり、英語や他の印欧語だけでなく多くの言

語における相違点や共通点が活発に議論されている。その分析の要点は大体次のようなものである。まず、非生成文法派の主張としては

(1) 能動態構文の動詞の目的語が、受動態構文では、主語に格上げされている。

(2) 能動態構文の主語が、消去される。あるいは、前置詞の補語に格下げされている。研究者によって「動作主」の背景化、脱焦点化(defocusing)のほうをより、強い要因とするか、(例：柴谷 1985) 目的語の格上げのほうをより強調するかによる違いはあるものの、その立場は、上に述べたようなものであり、受動態構文と非人称構文とは本質的に同じであると主張される。この点は評価できる洞察である。しかしどの分析であっても、主語は存在することが前提とされ、能動態文と受動態文との間に直接的な派生関係を認めるものである。しかし主語なしの非人称構文の存在が英語では不可能になったことなどの説明にはさらに深い洞察が必要と思われる。

それに対して、生成文法では、すでに能動態文と受動態文との間に直接の派生関係はなく、別個に生成されるとする。その点は評価できるが、英語に起こった史的变化の説明が、うまくできないなどの弱点がある。本研究は、生成文法の理論に依拠しながらも非人称構文の衰退、新しい受動態構文の創出など、英語史の中で起きた著しい統語的变化を説明することを意図したものである。

また本研究は Perlmutter や Postal などの関係文法で提唱された、自動詞には2種類あるという、非対格仮説を考えていく過程で、何故外項(主語)には、意味役割を与えないで、内項(目的語)には与える、最初から移動を前提とするような非対格動詞(unaccusative verb)が存在するのか、を説明する必要があると考えたところから出発している。

2. 研究の目的

本研究は、非人称構文の衰退、前置詞受け身構文や間接目的語を主語にした受身文などの新しい受動態構文の創出など、英語史の中で起きた著しい統語的变化が、英語や他の印欧諸語をも巻き込む大きな言語変化の一環としてあり、それに伴って、動詞の項構造の形成方法に変化が起きたことを明らかにしようとするものである。

その大きな変化とは、言語が語彙・意味志向型から、構造依存型へと変化していったということである。英語は短期間のうちに、lexical-thematic な言語から syntax が優位に働く言語へと変化した。その変化が起きた背景には、機能範疇の創発という、節構造の

中にあまり意味に依存しない文法的カテゴリーの出現があり、そのために以前には存在しなかった統語的現象がおり、また今まで可能だった構文が不可能となったのである、と主張する。伝統的に英語は synthetic language (統合的言語) から analytic language (分析的言語) へと変化したと言われてきたが、これは語順や屈折の衰退など、表面的に表れた現象に基づいている。その主張に理論的根拠を与え、さらにそれが他言語の変化をも説明できる普遍的傾向であることを明らかにすることを目指した。また、grammaticalization (文法化) として多くの研究者が取り組んでいる問題にさらに理論的根拠を与えることも意図した。

具体的には以下の3つのことを明らかにすることを目的とした。

(i) 古英語における、意味的に動機づけられた格体系の存在とその衰退

(ii) 非人称構文の衰退と統語的受動構文の出現は、(i)を背景にした機能範疇の出現によるものである。

(iii) 非人称や受動態構文だけでなく、機能範疇の創発により、英語の項構造を形成するメカニズムが、意味的なものから、統語により決定されるようになったこと。

3. 研究の方法

(1) 本研究は、研究方法としては生成文法の枠組みを活用する。語彙範疇と機能範疇を区別し、統語構造から言語を捉える手法は、英語の急激な変化をもっともよく分析出来る手法であるからである。

(2) しかし、生成文法ではうまく説明できない非人称構文の衰退、前置詞受け身構文や間接目的語を主語にした受身文などの新しい受動態構文の創出などの史的变化が存在する。この非人称構文や受動態構文に関しては、伝統文法、関係文法、機能主義文法など、多くのアプローチによる、世界の多くの言語を扱った優れた先行研究が存在する。本研究は通言語的視点からの分析も目指すために、これら伝統文法、関係文法、機能主義文法等の知見も活用する。自らの仮説を確立する前にもう一度これらの先行研究をまとめて、総括する。

(3) 非人称動詞を使った構文、受動態構文の例、さらに、意味的格体系を証明するための、時代による動詞の項構造の変遷と意味の変化の相関関係を証明するべく、時系列で例を集め、再整理し、史的事実の確認をまず行う。また、他の印欧語との比較もできる限り、例文を収集し、行う。

(4) 先行研究を踏まえて、史的事実、通言語的事実を確認し、生成文法の枠組みを使って動詞の項構造の形成方法に起きた変化を説

明する仮説を提示する。

4. 研究成果

2009年度は、おもに先行研究の総括と史的事実の確認をおこなった。その結果、非人称構文や受動態構文に関しては、伝統文法、関係文法、機能主義文法など、多くのアプローチからの先行研究があり、それぞれ受け継ぐべきところと不十分なところがあることがわかった。自らの仮説を提示する準備として各アプローチを批判的に検討しながら総括することを試みた。

まず、非生成文法派の主張としては、先にも書いたように次の様な主な2つの主張があり、

(1) 能動態構文の動詞の目的語が、受動態構文では、主語に格上げされている。

(2) 能動態構文の主語が、消去される。あるいは、前置詞の補語に格下げされている。研究者によって「動作主」の背景化、脱焦点化のほうをより強い要因と考えるか、目的語の格上げのほうをより強調するかという違いはあるものの、これらの分析は能動態文と受動態文との間に直接的な派生関係を認め、能動態のほうを、ある意味で基準形・規範形であるとして、そこから操作を加えて受動態文を派生しているということである。このような派生関係は、初期の生成文法でも認めてきたことである。確かにそのような操作が加わっているように見えるが、何故「格上げ」や「脱焦点化」のような操作をかけて文を作り出す必要があるのかという根本的な問題に答えていない。また、受動態構文と非人称構文とは本質的に同じであると言うその本質についても、統語的観点から見た場合、本質が同じであるとはどういうことか、という議論があまりなく、ある意味当然であるかもしれないが、それらの機能的・意味的な観点からの議論が中心である。構造という観点からもう少し深められた考察が必要ではないかという結論に至った。

この点に関しての考察をまとめて非人称構文と統語的受動態の問題に関してカナダで5月に開催された

SHEL 6 (Studies in the History of the English Language) という学会で

The demise of impersonal passives and the rise of 'transitive' passive constructions in English

というタイトルの学会発表を行った。

また言語の格体系が上で述べた言語変化の要因であることを論じるために英語でよく取り上げられる他動詞構文の増加、あるいは他動詞化の問題を、8月に広島大学で開催された SHELL2009 (The 3rd International Conference of the Society Of Historical English Language and Linguistics) において

What Caused Transitivity in the History of English? というタイトルで発表を行った。

また、この研究が解明しようとしている英語に起こった言語変化は、歴史言語学の分野で「文法化」として議論されるものと重なる部分が大いにあるので、文法化の本質を統語構造の変化という観点から問い直す内容の研究をまとめて、10月にオランダのグローニンゲン大学で開催された Current Trends in Grammaticalization Research (CTGR2009) において Grammaticalization as

'Syntacticization' という発表を行い、文法化の本質は、統語構造の変化から捉えることができるかと主張した。

2010年度は、格体系の観点から古英語を考察した。間接目的語を主語にした受動態文は古英語には存在していなかったが、与格として表される間接目的語はそのままの形で受動態となるいわゆる非人称受動態構文が存在していた事実に着目し、また現代のドイツ語でも同様に受動態では与格はそのままの形で残る事も合わせて考察し、意味に基づいた格体系が残っている言語では、項構造の形成は、項の持つ意味役割にふさわしい形態格を帯びて実現されるという結論に達した。すなわち非人称受け身構文とは、規範的な節構造から逸脱した構文ではなく、受動態動詞が持つ意味にあわせた項が、その意味役割にあった形態格を帯びてそのまま節構造として具現化されたものである。そこに何らかの統語的操作が加わる必要など無い。そう考えると、前置詞受け身は古英語には存在していなかったことも同じように分析できる。後の機能範疇 TP の出現により意味とは切り離されて項が実現されることになり、その場所に来る名詞句は意味役割に関係なく、主格をとれる様になり、統語的受け身が可能となり、前置詞受け身構文や間接目的語を主語にした受身文などの新しい受動態構文の創出が可能になった。これらの考察を Syntactic Passive: Its Rise and Growth in the history of English という論文にまとめ出版した。また主格付与の問題と、目的格付与の問題を統一的に取り上げて主格付与が創発した機能範疇 TP によって、統語的になされるようになったことと同じように目的語に与えられる格の付与も、統語的になされるようになり、その役割を果たす機能範疇の創発について The Loss of Lexical Case in the History of English: What is behind Transitivity? というタイトルで

第16回 International Conference on English Historical Linguistics で発表した。また「他動詞化」と称される現象は、動詞の持つ意味とは切り離されて他動詞構文が成立するようになったことによる、つまり項構

造の形成の原理が意味から統語的なものに移った点を Transitivity in the History of English という論文にまとめ、出版した。TP に関して関連した研究を Tense and Aspect というタイトルで研究発表した。さらに関連した格付与の問題などについて 11 月の日本英語学会第 28 回大会で「文献学と言語理論の接点を求めて」と言うタイトルのシンポジウムで「英語名詞句の発達」という研究発表を行った。12 月には津田塾大学言語文化研究所の研究発表会で、名詞句と格の問題を論じた。

これらの一連の研究活動で格と意味役割の問題に関して、項構造、つまり文型を決定するのは、項の持つ形態格が表す意味役割が重要な働きをしているという、踏み込んだ議論がある程度できたと考えている。また、評価も得られたと考えている。

3 年目にあたる 2011 年度は、英語の動詞の項構造の形成方法におきた変化は、さらに他の印欧諸語をも巻き込む大きな言語変化の一環としてあることを明らかにして研究を総括することをめざした。古英語において、節構造は述部の意味により必要とされるだけの項が、その項の持つ意味役割にふさわしい形態格を帯びて実現される。これは、格体系が現代英語とは違う、意味に基づく体系であるからである。この表れが非人称受動態構文であり、非対格動詞構文である。これは言語が「語彙・意味志向型」であることが項構造に重要な影響をおよぼしているということである。この「意味・志向型」の顕著な具現化はその言語の格体系であることから、現代英語のような格の解釈不可能性は古英語には該当しないことを論じた。現代英語のような、意味役割から切り離された構造格の体系は後々、格を与える、あるいは照合する機能範疇の存在が出現してから可能になったものである。この点をまとめた

Interpretable Case in the History of English という論文を開拓社から発行された「ことばの事実をみつめて」という単行本に掲載した。

現代英語の際立つ統語的特徴としてあげられる非対格構文が、実は古英語などでは、独立した統語構造として立てる必要はなく、非人称構文のなかに包摂されてしまうこと、この事実は、機能範疇を欠く「語彙・意味志向型」言語の性質から帰結するものであることなどを論じた研究を 7 月に国立民族学博物館（大阪）で開催された第 20 回 International Conference on Historical Linguistics において Unaccusativity revisited: Unaccusativity in the history of English

というタイトルで研究発表を行った。歴史的な観点からの非対格性の議論は他にほとん

ど例がなく、発表を聴いた世界の言語学者たちから高い評価を受けることができた。

項構造の変遷は、言語全体の構造の変遷と関連があり、動詞の項である名詞句の構造とも共通点があり言語が並列構造から階層構造へと変化していったことを論じた

Why has an article system emerged?: the shift from parataxis to hierarchy という研究発表を、8 月にウクライナ共和国の Lviv 大学で開催された第 7 回 International Conference on Middle English において行った。特に、構造の文法化という新しい視点を打ち出し、注目を浴びた。

こうして 3 年間の研究のまとめとして、言語は 意味優位型の、語彙的要素だけで構成される状態から機能範疇の出現で意味にあまり基づかない統語構造が優位に働く言語へと変化していったことを、一応の結論として出すことができた。

3 年間の研究で、主語は、機能範疇の創発を背景に英語の節構造において義務的な存在になっていったことが明らかとなったが、他の言語における主語の存在についてはあまり触れることはできなかった。主語とは何かという問題をさらに深く探っていく必要性を感じた。歴史的観点からの非対格動詞の研究はまだあまり多くはないので、その意味で、先鞭をつけることができたかと考えているが、もう少し時間をかけて深い議論をする必要があると感じた。

最初に目指した 3 つの目的、すなわち

- (i) 古英語における、意味的に動機づけられた格体系の存在とその衰退
- (ii) 非人称構文の衰退と統語的受動態構文の出現は、(i) を背景にした機能範疇の出現によるものである。
- (iii) 非人称や受動態構文だけでなく、機能範疇の創発により、英語の項構造を形成するメカニズムが、意味的なものから、統語により決定されるようになったこと。

は、まだ多少不十分な点はあるものの、かなりの程度達成できたのではないかと考える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 7 件)

① 大澤ふよう

論文名 Interpretable Case in the History of English

掲載書名 ことばの事実をみつめて (開拓社発行の単行本) 査読有

発行年 2011 年

181-190

②大澤ふよう

Transitivisation in the History of English
掲載書名 Aspects of the History of English Language and Literature (Peter Lang 社発行の単行本) 査読有
2010年 331-341

③大澤ふよう

Syntactic Passive: Its Rise and Growth in the history of English
掲載書名 Language Change and Variation from Old English to Late Modern English (Peter Lang 社発行の単行本) 査読有
2010年 117-138

④大澤ふよう

Genitives in Early English: Typology and Evidence (Review Article)、
掲載誌名 Studies in English Literature (日本英文学会機関誌) 査読有 51巻
2010年 146-155

⑤大澤ふよう

The Emergence of Functional Categories in the History of English: Ontogeny and Phylogeny in Language、掲載誌名 English Linguistics (日本英語学会機関誌)
査読有 26巻2号
2009年 411-436

⑥大澤ふよう

Introduction: The Emergence of Functional Categories From a Cross-linguistic Perspective、掲載誌名 English Linguistics (日本英語学会機関誌) 査読有 26巻2号
2009年 405-410

⑦大澤ふよう

The Emergence of DP in the History of English: The Role of the Mysterious Genitive、掲載書名 Historical Linguistics 2007、John Benjamins 社発行の単行本、査読有
2009年 135-148

[学会発表] (計9件)

①大澤ふよう

発表題名 Why has an article system emerged?: the shift from parataxis to hierarchy
学会名 7th International Conference on Middle English
発表年月日 2011年8月3日

発表場所 Lviv University
(Ukraine)

②大澤ふよう

Unaccusativity revisited: Unaccusativity in the history of English
学会名 20th International Conference on Historical Linguistics
2011年7月25日
国立民族学博物館 (大阪)

③大澤ふよう

英語名詞句の発達—属格をめぐる
学会名 津田塾大学言語文化研究所台48
回研究会
2010年12月23日
津田塾大学

④大澤ふよう

英語名詞句の発達 (シンポジウム「文献学と言語理論の接点を求めて」において)
学会名 日本英語学会第28回大会
2010年11月14日
日本大学

⑤大澤ふよう

The Loss of Lexical Case in the History of English: What is behind “Transitivation”?
学会名 16th International Conference on English Historical Linguistics
2010年8月23日
ペーチ大学(ハンガリー)

⑥大澤ふよう

Tense and Aspect: Parallelism between Ontogeny and Phylogeny
学会名 Workshop on Tense and Aspect in Generative Grammar : Typology and Acquisition
2010年7月1日
ノバ・デ・リスボン大学 (ポルトガル)

⑦大澤ふよう

Grammaticalization as Syntacticization
学会名 Current Trends in Grammaticalization Research (CTGR2009)
2009年10月8日
オランダ、グローニンゲン大学

⑧大澤ふよう

What Caused Transitivity in the History of English?
学会名 The 3rd International Conference of the Society of Historical English

Language and Linguistics
2009年8月30日
広島大学

⑨大澤ふよう

The demise of impersonal passives and the
rise of 'transitive' passive
constructions in English

学会名 Studies in the History of the
English Language 6

2009年4月30日

カナダ, バンフ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大澤ふよう (OSAWA FUYO)

法政大学・文学部・教授

研究者番号：10194127

(2) 研究分担者

なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者

なし ()

研究者番号：